

令和4年4月4日

[声 明 文]

今般出版の書籍に関して

旧満州黒川開拓団・黒川分村遺族会
会長 藤井宏之

私ども黒川分村遺族会（以下「当遺族会」と略）は、旧満州への開拓団であった黒川開拓団の引揚者による戦後組織として発足し、現在まで現地での犠牲者の慰霊と共に満蒙開拓の史実の語り継ぎ等に取り組んでいる任意団体です。この度、この黒川開拓団での終戦直後の苛酷で悲惨な女性たちの史実等を取り上げた平井美帆著『ソ連兵へ差し出された娘たち』（以下「当書籍」と略）が出版されました。そのことに関し、当遺族会として以下の通り反省等の思いを述べると共に、その上で、当書籍における問題点等についても指摘させていただくところです。

記

1. 黒川開拓団での出来事とそれに対する当遺族会としての受け止めについて

当書籍でも述べられている通り、終戦直後における旧満州での混乱の中、黒川開拓団において若い女性たちに苛酷な犠牲を強いたことは間違いの無いところであり、改めて当遺族会として受難女性の皆様方に対しての謝罪と、その犠牲によって団員の命を守っていただいたことへの感謝の思いを深くするところです。また、戦後の引き揚げ後、これらの史実に対して長年、当遺族会の中ではタブー視され、受難女性の皆様にも辛い思いをさせ続けてきたことも誠に申し訳ないことであったと思います。その遺族会も11年前から世代交代し、現在の第四代会長である当方を始め会員も当時のことをほとんど知らない戦後生まれの者が大半となっており、10年ほど前からは、このかつての受難女性たちのことに改めて向き合うようになりました。近年においては改めて謝罪と感謝の思いを表明すると共に、この史実等について記した「乙女の碑」の碑文も4年ほど前に設置いたしました。そして、これらのことも含めて、多くの犠牲を生み出すことになった満蒙開拓という史実について、これを後世に語り継ぎ、明日の平和のための教訓とするべく、当遺族会としても継承活動等に積極的に取り組んできているところです。

2. 今回の平井氏の書籍の出版に関して

今般、この受難女性たちのことについて取材を続けてこられた平井美帆氏により、健在者のお一人の方（文中の「玲子さん」）の証言を中心に、この黒川開拓団での出来事と戦

後の当遺族会の対応等について触れた内容の書籍が発刊されました。平井氏はこの件について早くから取材に取り組み、私どももその取材に積極的に協力させて頂き、それらの成果も踏まえての今回の出版であったものと思います。当遺族会では代変わりしてから、受難女性の健在者の皆さんと共に活動してまいりましたが、今回、中心的に取り上げられた「玲子さん」については、これまでほとんど交流できず、直接そのお気持ちをうかがうことが出来ずに来てしてしまいました。今回の平井氏の本により、その玲子さんが抱えてきた痛みの深さが私たちの胸にも突き刺さりました。遺族会として丁寧な対応ができていなかったことを反省し、玲子さんにすぐに連絡を取って直接謝罪の思いをお伝えすることが出来ました。そして今後の交流等もさせて頂けることとなりました。このようなきっかけを作って頂いた平井氏に対しては厚く御礼を申し上げるところです。

3. 平井氏の書籍内容の問題点について

その上でではありますが、今回の出版行為自体と、その記述内容等について私ども遺族会としてもやや納得がいかないところがあり、現在、平井氏とこれを出版した集英社に対して、出版経過とその記述内容等についての質問書をお送りしており、その回答をお待ちしているところです。そこで指摘させて頂いた主な点は以下の通りです。

- ① かつての遺族会の対応等の反省の下、現在の遺族会がこの史実を受け止め、謝罪と感謝の思いで活動している事実が、この本の中では意図的にほとんど触れられていないのではないかということ。
- ② 現在の遺族会が過去への反省の下、この史実等に向き合い、このことを語り残すための一環として設置した「『乙女の碑』の碑文」について、これを「パネル事件」等として軽視したかのような書き方をし、その活動を矮小化していること。
- ③ 文中において、過去における遺族会関係者の受難女性たちに対する不届きな行為、言動等があったとして非難しているも、確たる証拠のない伝聞や噂等だけでこれら関係者の実名を出していることは名誉毀損に当たるのではないか。
- ④ 平井氏の取材に協力してきた当方始め遺族会の役員等についても承認を得ないまま実名で非難するような書き方がされていること。さらに、事前の相談、連絡もなく出版されたことについて、著者及び出版社に対して不信の念を抱かざるを得ない。

※. なお、回答期限の3月31日までにはいずれからも回答は来ていません。

4. 今回の書籍のもたらす懸念について

言うまでもなくかつて黒川開拓団で起きたことは大きな過ちであり、それについては当遺族会としても世代を超えてきちんと向き合っていかななくてはならないものと思っていま

す。同時に、当時、そのような事態を招くまでに開拓団を追い込むことになった満蒙開拓という史実についても学び、語り継ぐ事業にも取り組んできたところです。

しかしながら、今回の平井氏の本の出版とその記述内容等に衝撃を受け、これまで体験者として語り継ぎ活動に取り組んできた遺族会の会員の中には「もうこのことについては語りたくない」とまで言う人も出てきてしまっています。私どもも、向き合いにくい「不都合な史実」とも言うべきこの史実に、勇気を出して向き合っていくことを今の遺族会の基本的スタンスとして取り組んできています。しかし、今回の平井氏のような形での出版はそういった、全国各地で当時の不都合な史実も含めてこれに向き合い、語り継いでいこうとしている人々の口を再び塞いでしまうことにもなりかねないことを懸念しています。

5. 最後に

私どもも平井氏、並びに集英社と争うことは元より望んでおりません。たとえ向き合いにくい史実ではあっても、それに向き合わなくてはならないとの思いから、平井氏の取材に対しても協力を惜しみませんでした。しかし、今回の出版はそういった協力、信頼等を結果として無視するものであり、さらに受難女性と遺族会の分断を深めかねない文脈は誠に残念な限りです。共にこういった史実を語り継いでいくために、また私どもの遺族会としての現在の取り組み等からしても、平井氏におかれては書籍化と同時に何らかの解決に向けた投げかけをしていただければ有難かったとも思います。今後における満蒙開拓の史実の継承等に向けて、その道が閉ざされたりすること等の無きよう、平井氏、並びに集英社に対しては前向きな改善策等を講じて頂けることを願っています。

そして、当遺族会として、これからも過去への反省の下、受難女性の皆さんへの謝罪と感謝の思いを改めて心に刻み、明日の平和実現に向けて史実継承活動等に励んでまいりたいものと思います。

皆様方のご理解、ご支援、ご鞭撻をどうか宜しくお願い申し上げます。

以上